

以下の文章は、第二次世界大戦前後のビルマ（ミャンマー）を舞台にした、竹山道雄著『ビルマの豎琴』の一節である。この文章を読んで、問1および問2に答えなさい。

ビルマは、宗教国です。男は、わかいころに、かならず一度は僧侶になって、しゅぎょうします。ですから、われわれくらいの年ばいのぼうさんが、たくさんいました。

なんというちがいでしょう！われわれの国では、わかい人は、みな軍服をきたのに、ビルマでは袈裟けさをつけるのです。

われわれは、収容所にて、よくこのことを議論したものでした。——一生に一度、かならず軍服をつけるのと、袈裟をきるのと、どちらのほうがいいのか？どちらがすすんでいるのか？国民として、人間として、どちらが上なのか？

これは、じつに、きみような話でした。議論していくと、いつも、しまいには、なんだか、わけがわからなくなってしまうのでした。

まず、この両者のちがいは、つぎのようなことだと思われました。——わかいころに軍服をきてくらすような国では、その国民はよくはたらいて、能率があがる人間になるでしょう。はたらくためには、こちらでなくてはだめです。袈裟は、しずかにおいのりをしてくらしているためのもので、これでは、戦争はもとより、すべて、いきおいよく仕事をすることはできません。わかいころに袈裟をきてくらすれば、その人は、自然とも、人間ともとけあって生きるようなおだやかな心となり、いかなる障害をも、じぶんの力できりひらいて、戦っていこうという気はなくなるでしょう。

われわれ日本人は、まえには、袈裟にちかい和服をきていましたが、ちかごろでは、たいいてい軍服にちかい洋服をきるようになりました。それも、とうぜんです。日本人は、むかしは、すべてと、とけあった生活を好んでいたのですが、いまは諸国民のあいだでも、もっとも活動的な、能率のあがる国民の一となったのですから。つまり、こんなところにも、世界をそのままに受けいれて、それにしたがうか、または、じぶんの思いのままにつくりかえていこうとするか——という、人間が、世界にたいする態度の根本的な差違があらわれていて、すべては、それによってきまっているのです。

ビルマ人は、都会の人でも、いまだに洋服をきません。むかしながらの、あのビロビロとした服装をしています。世界の舞台にたつ政治家も、洋服をきると、国民の人気なくなるから、いつもビルマ服をきています。これは、ビルマ人が、まだ、むかしのままで、日本人のようにかわっていないからです。かれらは、まだ、じぶんが主になって、力や、富や、知恵ですべてを支配しようとは思わずに、人間はへりくだって、つねに、じぶんより以上のものにいだかれ、おしえられてすくってもらおうとねがっているのです。それで、じぶんたちとは心がまえがちがう、洋服をきている人を信用しないのです。

出典：竹山道雄(1948)『ビルマの豎琴』中央公論社

問1 日本人とビルマ人の「世界にたいする態度の根本的な差違」とはどのようなものか、本文中の言葉を用いて、90字以上110字以内で説明しなさい。

問2 問1で答えた日本人の世界に対する態度は、第二次世界大戦後、現在に至るまで、どのように変わったのか、あるいは変わらなかったのか。「公害」と「原発事故」という語を用いて、400字詰め原稿用紙3枚であなたの見解を述べなさい。なお、答えは原稿用紙の通常の使い方に沿って、適宜段落分けをしながら使用したうえで、3枚目に達していなければならないものとする。

注意事項

- (1) 草稿用紙は、メモなどに自由に使用して構わない。
- (2) ただし、草稿用紙は解答用紙と共に試験終了後に回収する。
- (3) 解答用紙および草稿用紙は、未使用のものもすべて記入し、試験終了後に提出すること。